

ラロ貝塚群出土土器の型式学的編年研究

小川英文

はじめに

フィリピンのルソン(Luzon)島北東部、カガヤン(Cagayan)川下流域に 50km にわたって分布するラロ(Lal-lo)貝塚群で現在進行している考古学調査は、低地農耕社会と熱帯雨林狩猟採集社会との相互依存関係の歴史プロセス解明を目的としている(小川 2000b, 2002a, 2003b)。調査対象は河岸に立地する貝塚や後背地の丘陵に分布する洞穴、それに現在でも貝塚の上で生活し、貝の採集活動を行っている人びと(小川 1997)、さらに丘陵地帯を生活の基盤とし、周囲の社会と密接な関係をもって生活する狩猟採集民イタ(Ita)の人びとである(小川 1996, 2000a)。貝塚は淡水産二枚貝 3 種と巻貝 5 種で形成されているが、主体となるのはカビビ(Cabibi)と呼ばれる淡水産の二枚貝である。カビビの堆積は河岸から 5~10km はなれた洞穴内でも確認されている。こうした発掘調査と民族調査の成果を総合することによって、2つの異質な社会間に起こった関係の歴史を復元することが可能となる。しかし考古学的には、まずラロ貝塚群のすべての遺跡の時間的・空間的配置を確定する作業が必要となる。そのためには、ラロ貝塚群出土土器の地域的編年体系の確立が急務である。

これまでの調査によってラロ貝塚群から発掘された 4 つの土器群は、各貝塚の立地条件と出土層位とに特定の関係が認められた(図 2~4)。4 つの土器群のうち最も古いと考えられる有文赤色スリップ土器群は、カガヤン川に面した標高 50m の石灰岩台地上に立地するマガピット(Magapit)貝塚から出土した。有文赤色スリップ土器群以降に位置づけられる 3 つの土器群は、いずれも標高 10m 以下のカガヤン川河岸段丘上に立地する貝塚から検出されている。まず、有文赤色スリップ土器群に続く時期に属すると考えられる無文赤色スリップ土器群は、河岸段丘上にある貝塚の貝層下に形成されているシルト層中から出土する。それに続く有文黒色土器群と無文黒色土器群は、いずれも貝層中から検出される。これら 3 つの土器群は、層位的に下層から上層に向かって、無文赤色スリップ土器群→有文黒色土器群→無文黒色土器群という順序で出土することが確認されている。

出土序列の層位的な確認に加え、これまでの土器群の型式学的研究によって、各貝塚遺跡の同時代の分布状況も徐々に明らかとなっている(青柳他 1991, 小川 2002b, c, 2003a, 田中 1993-2002, 図 2, 3)。図 4 に示したように、現在までにラロ貝塚群では 4 つの土器群の各時期、それに前後する土器出現以前と貿易陶磁器の時代を加えた 6 期に時代区分が可能である。4 つの土器群の絶対年代については AMS14C 測定値により、無文赤色スリップ土器群が 3400~3000BP、有文黒色土器群が 2000~1500BP、そして無文黒色土器群が 1500~1000BP という測定値が得られている(表 1)。有文赤色スリップ土器群の絶対年代については AMS14C 年代測定値が得られていないが、AMS を用いない 14C 年代測定値では 3800~2800BP という測定値が得られている(註 1)。しかし、有文赤色スリップ土器群は型式学的に他の 3 つの土器群に先行するものと考えられることから、現時点では 4000 年前前から無文赤色スリップ土器群が出現する 3400 年前まで、すなわち紀元前 2 千年紀の前半という年代幅でとらえられると考えている。

以上の成果を踏まえ
 本稿では、ラロ貝塚群
 から出土した4つの土
 器群について、それぞ
 れの器種ごとのタイプ
 分類を整理し、各時期
 のメルクマールとなる
 特徴的な器形を抽出し
 て、今後の編年研究の
 ための基本的資料を提
 示することを目的とす
 る。具体的には、まず
 各土器群の器種と口縁
 部などの特徴的形態の
 バリエーションを提示
 し、つぎに各時期を画
 すメルクマールとなる
 特徴的な口縁部形態を
 抽出し、同時期に属す
 遺跡の出土品相互の類
 似性を明らかにする。
 以上の作業を経て、4
 つの土器群を出土する
 ラロ貝塚群各遺跡の時
 代的・空間的分布の変
 遷を明確にする。

1. 有文赤色スリップ 土器群

ラロ貝塚群中で有文赤
 色スリップ土器群が主
 体的に出土するのは、
 現在までのところマガ
 ピット貝塚のみで、類
 似する口縁形態の土器
 片がガエラン(Gaerlan)
 貝塚とマバゴッグ

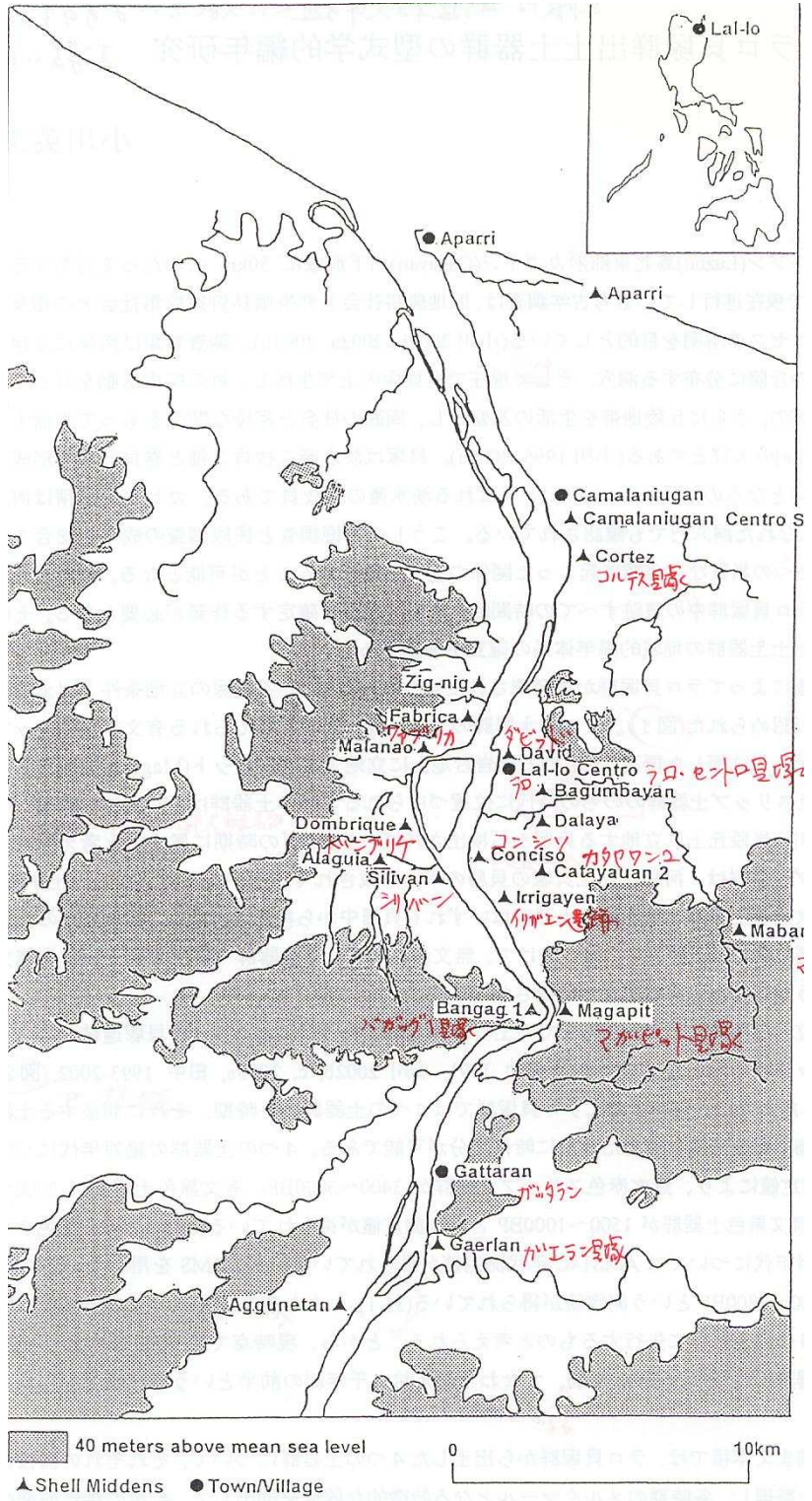
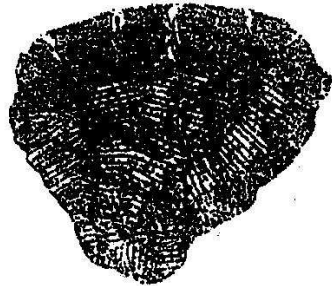
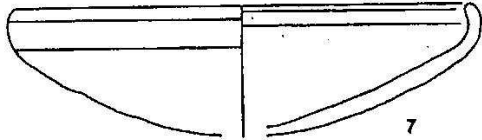
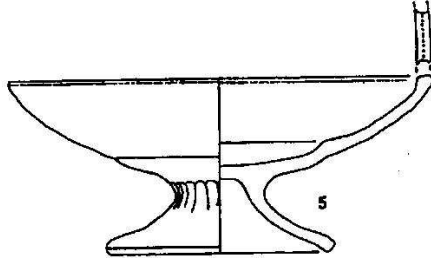
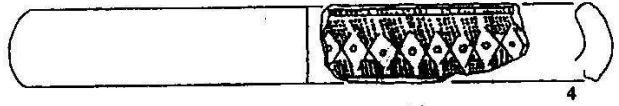
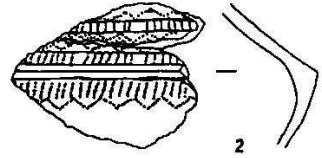
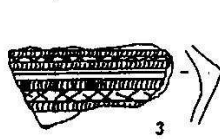
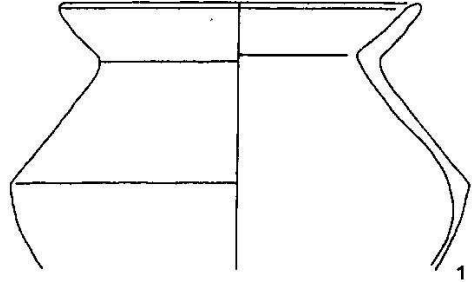
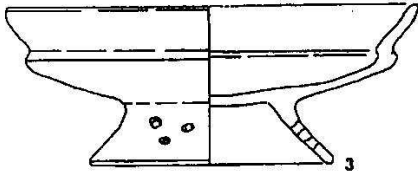
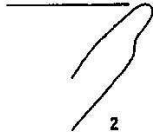
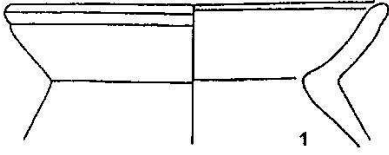
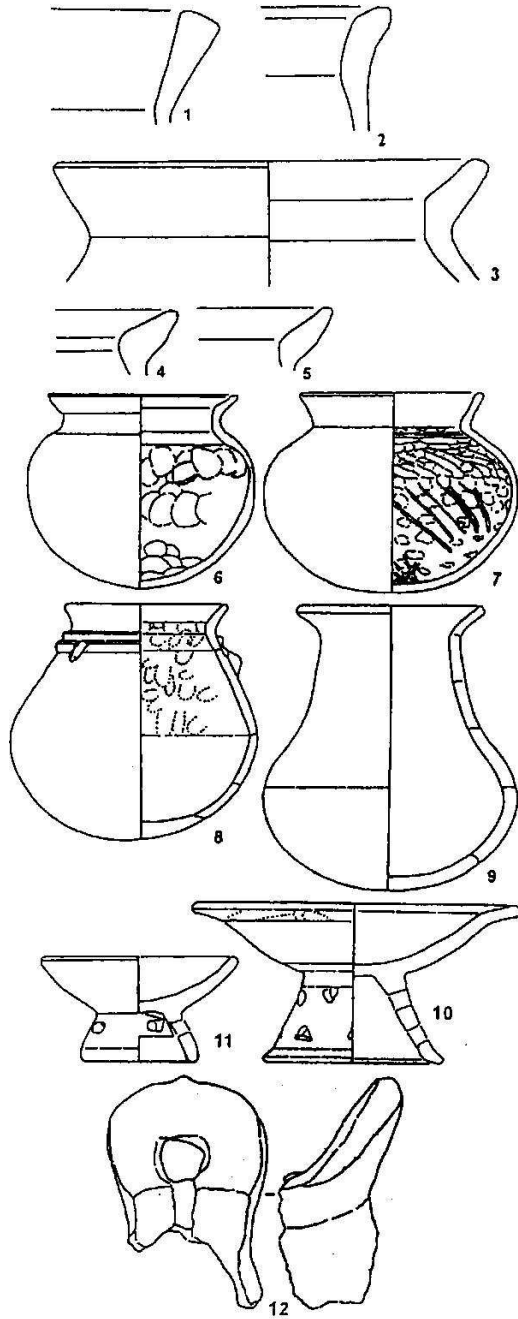


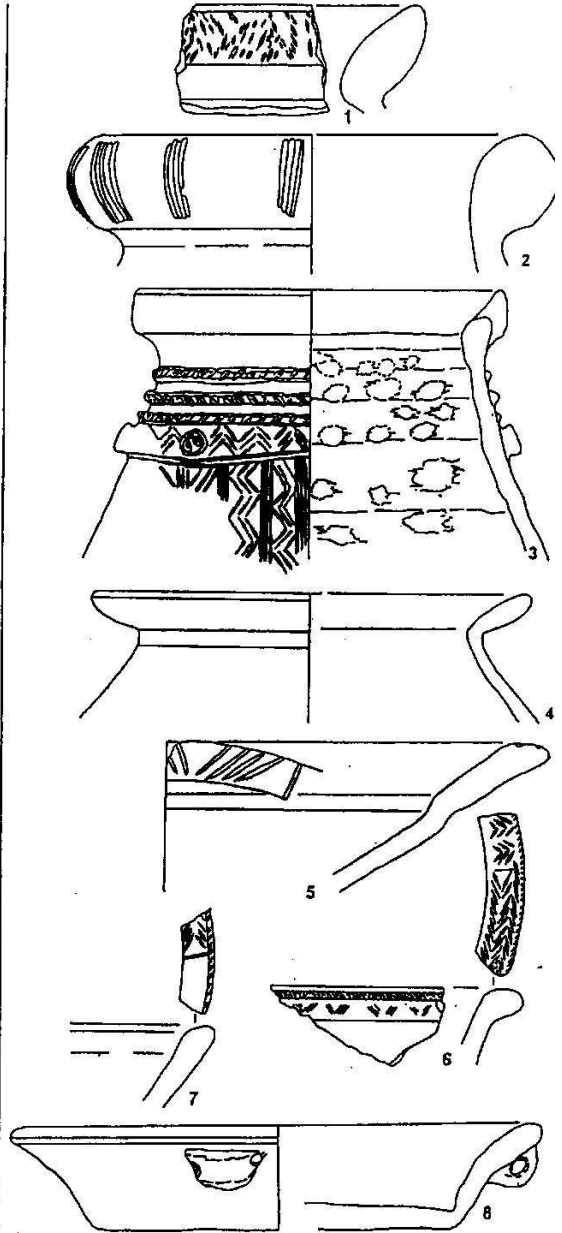
Fig. 1 Site Location Map of Lal-lo Shell Middens ラロ貝塚群分布図

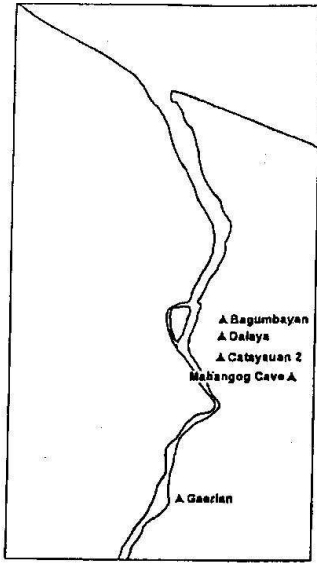


Non-Decorated Black Potteries (B2)

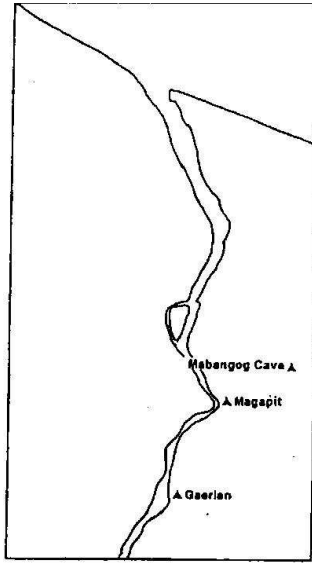


Decorated Black Potteries (B1)

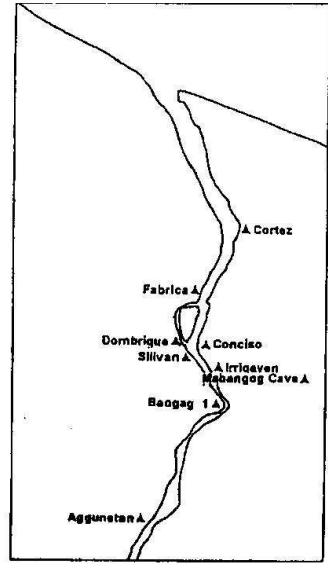




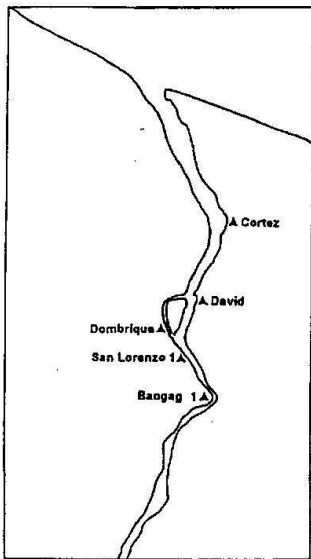
Phase 1: Flake Assemblage
; Before Second Millennium BC.
紀元前 2000 年以前



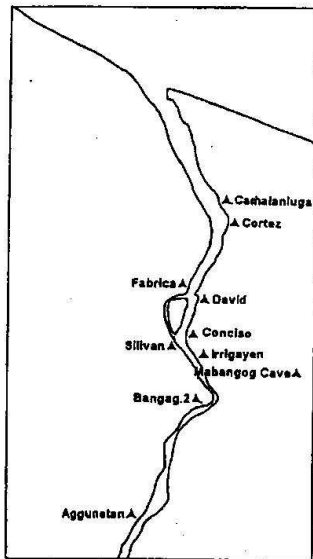
Phase 2: Decorated Red-Slipped Pottery (R1)
; Second Millennium BC.
紀元前 2000 年



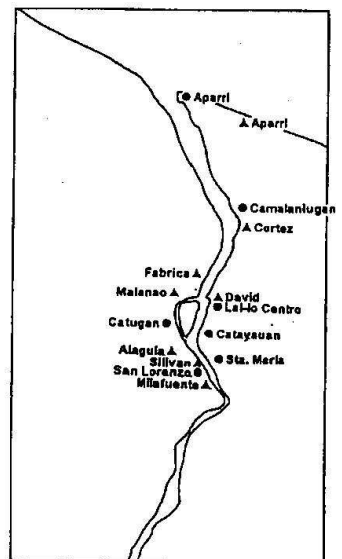
Phase 3: Non-Decorated Red-Slipped
Pottery (R2); 3400 to 3000 BP.
3400 ~ 3000 年 BP



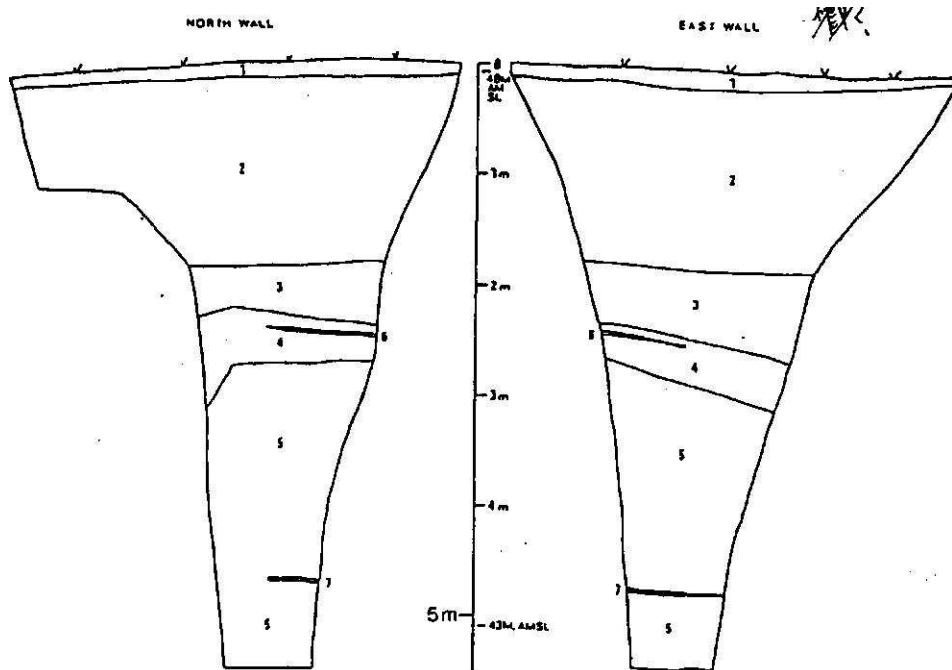
Phase 4: Decorated Black Pottery (B1)
; 2000 to 1500 BP.
2000 ~ 1500 年 BP



Phase 5: Non-Decorated Black Pottery (B2)
; 1500 to 1000 BP.
1500 ~ 1000 年 BP



Phase 6: Trade Ceramics (14th ~ 18th Century)
; 14th to 18th Century
▲ Shell Middens ● Town/Village



マガビット貝塚土層注記 Decorated Red-Slipped Pottery Phase (R1)

- 1 : 表土 Surface Soil
- 2 : 褐色混土貝層 Shell Layer with Brown Soil
- 3 : 暗褐色混土貝層 Shell Layer with Dark Brown Soil
- 4 : 破砕貝層 Broken Shell Layer
- 5 : 黄褐色混土貝層 Yellowish Brown Shell Layer
- 6・7 : 炭化物層 Charcoal Layer

(Mabangog)洞穴からわずかに出土するという状況である。マガビット貝塚は、カガヤン川河口から約40kmの地点、河岸に面した標高50mの石灰岩台地上に立地する。貝塚は台地の鞍部に貝、動物骨、土器片等が投げ込まれたかたちで形成されており、発掘前の地形測量では、5×10m、高さ3mのマウンド状を呈していた。貝層は深度5.5mに達する混貝率90%以上の純貝層であった(図5)。2枚の薄い炭化物の層が検出されたが、遺構は検出されていない。土器片は貝層上部から下部までくまなく出土した(青柳他1988)。土器群の型式学的分析の結果、5.5mの貝層深度にもかかわらず、これらの土器群は同一型式におさまるものであることが明らかとなった(青柳他1991, 1993)。

有文赤色スリップ土器群は、器面に赤色スリップが塗布され、研磨された、広口の口縁をもつ Jar タイプの土器や、浅鉢に圈足が付く Bowl A タイプの土器、そして赤色スリップの塗布と磨き調整がなく、叩き目を外面に残す浅鉢型の Bowl B タイプ土器に分けることができる。前者を精製、後者を粗製の土器ということも可能である。文様については、施文方法が櫛状工具による列点文、あるいは櫛歯状工具による連続刺突文を中心とし、施文部位は Jar タイプの土器では胴部屈曲部に、Bowl タイプの土器は口縁部に集中する傾向がみられる。また、文様の内部に石灰が埋め込まれたものも散見される。以下では、Jar タイプと Bowl タイプの2つの器種ごとに、有文赤色スリップ土器群の特徴的な器形のバリエーションを提示する。

1-1. Jar タイプ土器

図6は有文赤色スリップ土器群 Jar タイプ土器の器形のバリエーションを提示したものである。口縁形態の特徴をもとに、J-1 から J-8 までタイプを細別した。

J-1 1は広口の口縁で、胴部に屈曲部をもつ丸底の Jar である。赤色スリップは外部全面と内面の頸部まで塗布されている。このような属性をもつ土器は、この時期の Jar タイプ土器のなかで一般的にみられる。

J-2 2は頸部から長く直立する口縁部でをもち、口唇部で外反し、肥厚している。

J-3 3は厚手に作られた無頸の Jar である。口縁部をわずかに外反あるいは肥厚させている。全体の器形は、口縁から胴部最大径まで広がり、丸い底部をもつものと考えられる。

J-4 4も無頸だが、薄手に作られた Jar である。口縁部はわずかに立ち上がり、外面は肥厚している。J-3 と同じく全体の器形は胴部で大きく広がり、丸底を呈すると考えられる。

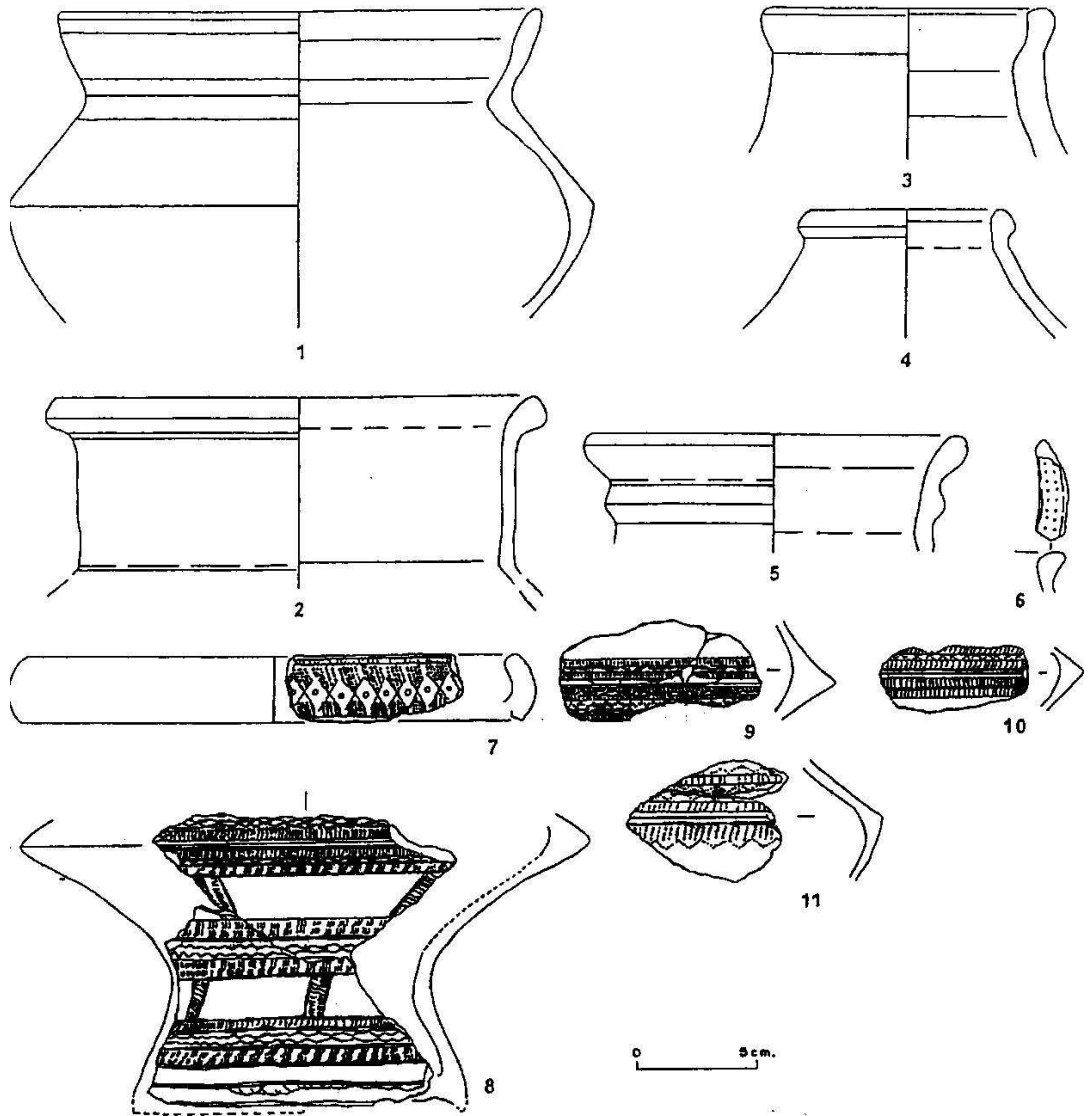
J-5 5は頸部からわずかに外反する口縁部で、口唇外面を肥厚させ、直下に一条の隆帯を廻らせている。

J-6 6も無頸の Jar タイプ土器であるが、幅広に作り出された口唇部には2列の列点文が配されている。

J-7 7は内湾する広口口縁外面に施文がある。文様の配置は、鋭い沈線による菱形区画を横位に連続させ、つぎに菱形区画の内部中央に棒状工具によるひとつの刺突を配す。さらに区画外部の上下に、櫛歯状工具によるやや斜めの列点文をくまなく配したものである。このタイプの土器はあと5点出土しており、田中が詳細に検討している(田中 1996)。この文様構成と施文部位はこの時期の他の土器にはみられない特異なものである。またこれらの赤色スリップは暗い色調で、胎土は粗い。外面の色調と胎土は次に述べる J-8 タイプと共通する性格である。

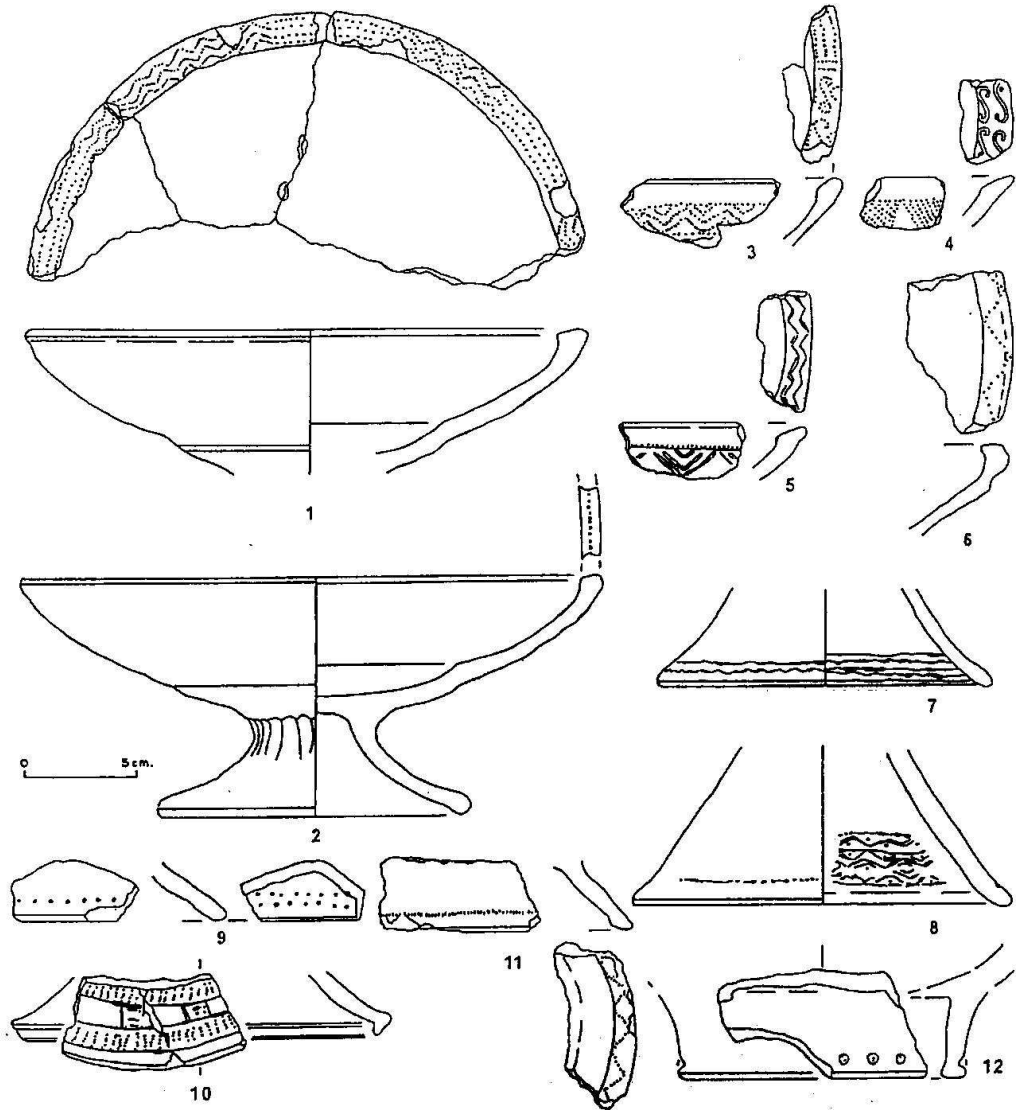
J-8 8はマガピット貝塚下の国道脇で、発掘に先立つ 1986 年に表面採集されたものである。平らな底部から内反して立ち上がり、いったん胴部中央で絞込まれたのち、口縁部まで外反する。さらに口縁部は屈曲部を作り出しながら内湾している。文様は複雑に構成されている。沈線で区画された横位の文様帯が口縁、胴部中央、そして底部に3本配置され、それら横位の文様帯は縦位の文様帯によって繋がれている。横位の文様帯は3つの異なる要素から構成されている。1つは細かい爪形文の連続、次に細かい円形の押圧痕を蛇行させ2本横位に配したものの、そして最後にやはり細かい爪形文を3個1単位として施文し、それを上下2列に配したものである。また、縦位の文様帯には左右2列の連続爪形文を配している。さらに底部には、2本の沈線で区画された文様帯のなかに、連続する X 字文が一条廻っている。

9, 10, 11 はいずれも Jar タイプの胴部屈曲部である。9 と 10 は沈線文が主体に施文されている。9 は横位の沈線で区画された文様帯のなかに、非常に細かい沈線で文様を構成している。10 はやはり沈線で横位に区画された文様帯のなかに、連続爪形文を主とした文様が配されている。一方 11 は横位の沈線区画はあるが、文様の要素は櫛歯状工具による連続刺突文を中心としている。11 は赤色スリップが明るい色調で、9, 10 の暗いスリップとは異なっており、両者を同一の範疇に入れることはできない。9, 10 は J-8 に分類し、8 と同じ技法によって作り出された土器である。そして 11 は、沈線による文様区画をもつ点で 8 ~ 10 に類似性がみられるが、Bowl A タイプをも含めた刺突文のグ



グループに属する土器として考えたい。

Jar タイプ土器の大半のものには明るい赤色スリップが塗布され、その上に磨きが施されている。Bowl A タイプも含め、マガピット貝塚の土器のほとんどはこの色調と胎土である。そしてこれらの土器の文様は刺突文によって構成されている。これとは対照的に8、9、10の沈線文が配された土器の赤色スリップの色調は暗く、胎土は粗い。沈線文の土器の出土量は刺突文土器と比べて少ない。しかしこれらの出土状況を見ると、貝層の上部から下部にかけて均質に出土しており、貝層形成過程のなかでその時期を特定することはできない。これらはマガピット貝塚で本来製作された土器とは考



えにくく、外部から搬入されたものと考えている。ただし、ラロ貝塚群以外のどの地域から搬入されたものかは未だ明らかではない。また J-7 の 7 と J-8 の 11 は好対照を見せる。両者とも沈線と刺突を混在させている点では共通するが、色調と胎土は異なる。この現象は、同時期に離れた場所で製作された両者の間で、文様と施文方法についての情報のやり取りが行われていたことをうかがわせる。

1-2. Bowl A タイプ土器

図 7 は、赤色スリップが塗布され、研磨されている Bowl A タイプ土器である。その器形は 1 と 2 に示したように浅鉢状の器部に圈足が付くものである。内外面に明るい色調の赤色スリップが塗布され、磨きが施されている。赤色スリップはときに圈足内面にもみられる。文様については Jar タイプ

のように刺突文と沈線文のグループ化はできず、ほとんどが刺突文である。

Bowl A タイプ土器の口縁部は、大きく外反して立ち上がる胴部の先端を内湾させ、さらに口唇を幅広に肥厚して作り出した形となっている。1 から 6 に示したように、この幅広の口唇部には連続する山形や平行する列点、あるいは S 字状に配された連続刺突文が施文されている。文様は口縁外面にも施されている。3 と 5 は三重に山形連続刺突文を配したもので、4 は連続刺突文を斜位に施文して逆三角形に構成し、それを連続して口縁外面に廻らせたものである。

7 から 11 は、Bowl A タイプ土器の圈足部である。裾広がりを作り出された足縁部内外面に文様が施文され、いずれにも連続刺突文が配されている。7 と 8 は圈足内面の施文のほうが、外面よりも精巧に施されている。10 は圈足縁部が内側に屈曲して作り出されている。文様構成は 2 本の沈線によって区画された文様帯を横位と縦位に配し、格子状にしている点の特異である。区画内には他と同様に連続刺突文が縦に施文されている。11 は他と異なって短い圈足である。足縁口唇部は口縁同様に肥厚されて平らに作り出され、連続刺突文が山形に配されている。7, 8, 9, 11 には土器を使用している時点では外から見えない圈足部の内面に文様が施されている点で特異である。

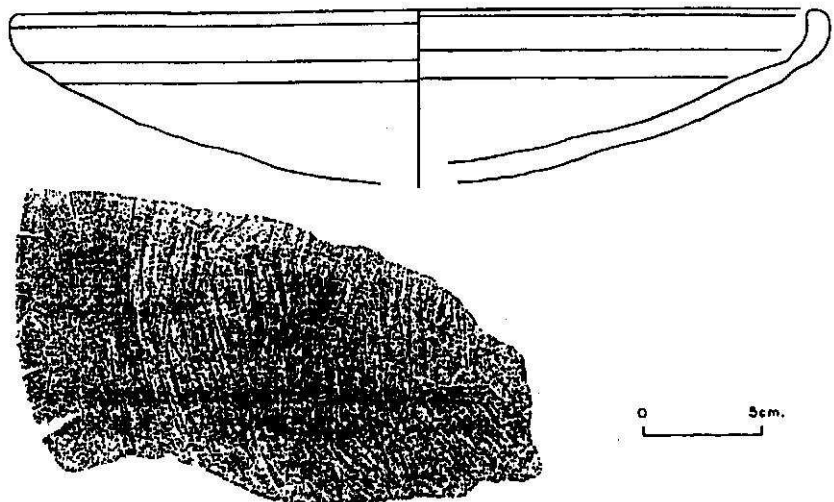
12 の圈足は、裾がすばまる特異な形態をもつ。胴部や全体の形状は推測できないが、Bowl タイプの胴部ではなく、胴長の Jar タイプ土器である可能性もある。胴長の Jar にこの圈足がついていたとすると、外見からは圈足が付属しているのではなく、平底をもつ Jar と錯覚する視覚的効果がある。機能的には貯蔵用の Jar を安定させるためのものと考えられる。底面近くには、径の大きい棒状工具による刺突列点文が横位に並ぶ。

Bowl A タイプ土器の赤色スリップは明るい色調のもので、Jar タイプ土器の大半と共通している。しかし Jar タイプの域外搬入品と推測される土器の特徴(暗い色調の赤色スリップ)をもつ一群の土器は、Bowl タイプ土器には認められない。

1-3. Bowl B タイプ土器

有文赤色スリップ土器群のなかに、赤色スリップの塗布も研磨も施されていない土器の一群がある。

それらは器外面下半にタタキ目を残し、内面はナデ仕上げが施されている。マガピット貝塚では数多く出土しているが、図 8 には 1 点のみ示した。浅鉢状の器部に丸い底部をもつ。胴部は大きく外反しながら立ち上がり、口縁部は内湾する。胴部外面の叩き目は、



叩き板に溝状の彫り込みを入れていたために付けられたものと考えられる。叩き目の他に、土器乾燥中に置かれていたマット痕を残しているものも多い。Bowl B タイプ土器の分布が広範囲に及ぶことは、80年代中頃から知られていた。ラロの町から 80km 南のカガヤン州都トゥゲガラオ市内カガヤン川東岸に位置する、国道 5 号線沿いのカリッグ(Carig)地区、そしてラロの町から 30km 南隣に位置するガッタラン(Gattaran)町のナシピン(Nassipin)村(カガヤン川東岸)で表面採集品として発見されている。また最近では、マガピット貝塚から南東約 10km のナドゥッガン村(Naddungan)でも遺跡分布調査中に発見されている。この遺跡はカガヤン川右岸の支流ドゥモン川が形成する沖積平野を望む標高 40m の丘陵上に位置する。これら 3 遺跡はいずれもラロ貝塚群の貝層を主体的に形成する貝種カビビの生息域外に位置するため、貝層は形成されていない。

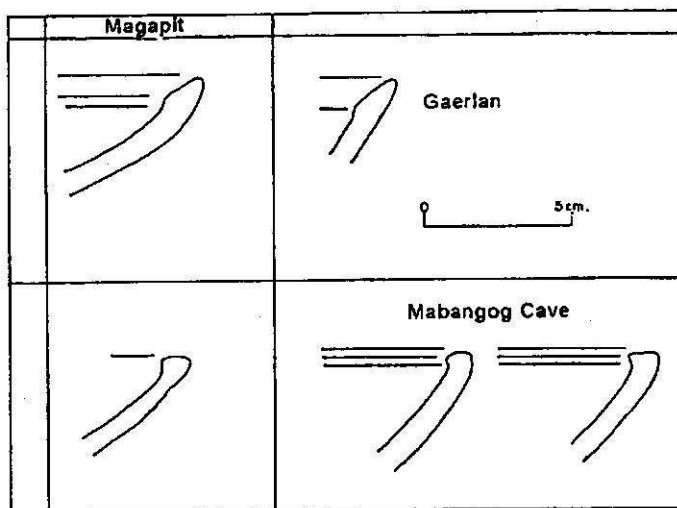
1-4. 他遺跡出土土器との類似性の比較

マガピット貝塚出土の有文赤色スリップ土器群の類似品は、わずかであるが他の遺跡でも確認されている。Jar タイプ土器に類似品を探し出すことはできなかったが、Bowl A タイプ土器口縁部の特徴をもつ類似品を、ガエラン貝塚(Gaerlan)とマバゴッグ洞穴(Mabangog)出土の土器片に見いだすことができた。図 9 はそれら類似品を対比したものである。2 つのタイプの Bowl の口縁には、いずれも連続刺突文などの文様は施されていないが、幅広に作り出した口唇部の形態が類似している。

ガエラン貝塚はマガピット貝塚から 10km 上流のカガヤン川東岸段丘上に位置している(Garong 2002)。貝層上面では赤色スリップ土器が少量出土するが、その下の貝層からはチャートや安山岩のフレークが出土し、土器はみられなくなる。このような土器の出土状況から、ガエラン貝塚はカガヤン川下流域の土器の出現という問題を考える場合、マガピット貝塚と並んで重要な貝塚である。マバゴッグ洞穴はマガピット貝塚から北東へ 6 km、標高 50m の山中に位置

する(Ogawa 1999b)。岩盤までの厚さ 30cm の堆積層には、カガヤン川河岸貝塚を構成する貝種と同じ淡水産二枚貝のカビビが含まれている。また遺物は赤色スリップ土器と黒色土器とが出土した。しかし文様をもつ土器片は検出されなかったため、土器から洞穴居住の時期を特定することは困難であった。

有文赤色スリップ土器群の時期における遺跡の分布は、その後の 3 つの土器群の時期における遺跡の分布状況とは大きな違いがある。これまで有文赤色スリップ土器群が出土し、あるいは表面採集されている地域は、マガピット貝塚の南と東に限定されている。しかも Bowl B タイプ土器の分布にみるように、ラロ地域から南へ 80km、



あるいは東岸の内陸丘陵地帯 10km にまで及んでいるが、その後の土器群の時期になると、遺跡分布の中心はマガピット貝塚以北のカガヤン川下流域に集中する傾向がみられる。このような遺跡分布の違いがなぜ引き起こされたのかについては決定的な解答をもちあわせていない。しかし問題をラロ地域に限定して考えると、マガピット貝塚以北のカガヤン川下流域の古環境は、有文赤色スリップ土器群の時期にカビビの生育に必要な条件を満たしてはいなかった可能性を想定できる。カビビは水の流れが緩やかな、沼地の環境には生息しない。海水面が現在よりも高かった時期には、川の流れは緩慢となり、カガヤン川下流域のマガピット貝塚以北では沼地が広がっていた可能性がある(註2)。一方マガピット貝塚以南では、カガヤン川の古環境はカビビの生息要件に適合し、資源として採集した人びとによってマガピットやガエランなどの貝塚が形成され、あるいはマバゴッグ洞穴がある山中にまでカビビを流通させたものと考えられる。

2. 無文赤色スリップ土器群

ラロ貝塚群における無文赤色スリップ土器群の遺跡は、有文赤色スリップ土器群の時期の遺跡よりも広範囲に分布するようになる(図4)。この時期の遺跡は標高 10m 前後のカガヤン川河岸段丘上へと移行する。遺跡の分布は北はカガヤン川東岸のコルテス(Cortez)貝塚から、南はバガッグ(Bangag) 1 貝塚までの約 20km のカガヤン川両岸の段丘上に集中する。無文赤色スリップ土器群はいずれの遺跡でも貝層下のシルト層から検出されている。それ故この時期に属す遺跡の最大の特徴は、貝塚が形成されていないことにある。これまで無文赤色スリップ土器群は、河岸段丘上の貝塚の貝層下を調査した際に発見されている。他の3時期の土器群は大量の貝とともに検出されるため、貝を中心とする水産資源を集中的に利用したことがうかがえるが、無文赤色スリップ土器群の時期にはそれが無い。生業活動の様式が他の時期とは異なっていたと考えるべきだが、現在それに応えられるだけの資料はない。

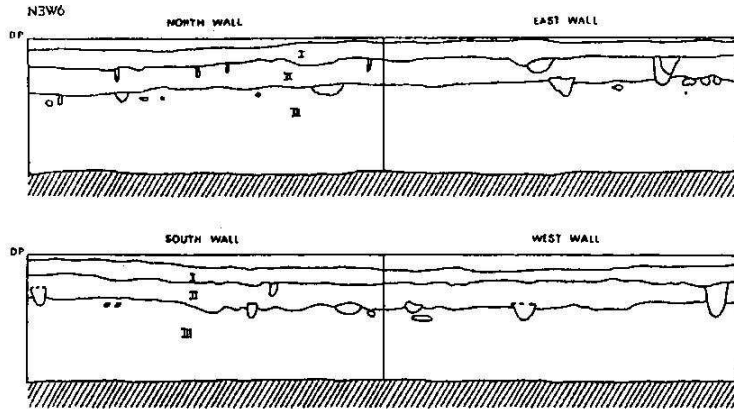
無文赤色スリップ土器群の最大の資料を提供しているのは、サンタマリア(Santa Maria)貝塚内のイリガエン(Irigayen)遺跡である(小川 2002b, c)。地表面直下から約 50cm 堆積する貝層を発掘後、その下のシルト層から無文赤色スリップ土器群が検出された。貝層からは炉、ピットなどの遺構と無文黒色土器群が検出された(図 10 左下)。またシルト層まで掘り込みのある無文黒色土器を副葬した伸展墓も発掘されている(図 10 右下)。一方シルト層中からは炉と考えられる焼土、炭化物、灰の集中区が検出されている(De La Torre 2000)。しかし無文赤色スリップ土器群片の検出はとぎれることなく続き、シルト層の深度 1.5m まで達したところで発掘を終了した。

無文赤色スリップ土器群はその胎土や色調などが有文赤色スリップ土器群のそれに類似している。しかし文様の施された土器片は極めてわずかししか検出されておらず、しかも精緻さに欠けている。器種が Jar と Bowl タイプの土器によって構成される点では類似しているが、有文赤色スリップ土器群の叩き目を残した Bowl B タイプ土器はない。また Jar タイプ、Bowl タイプともに検出された土器片のすべてに、赤色スリップの塗布の後に磨き調整が施されている(小川 2002c)。

2-1. Jar タイプ土器

無文赤色スリップ土器群の Jar タイプ土器は、J-1 から J-5 まで分類できる。(図 11)

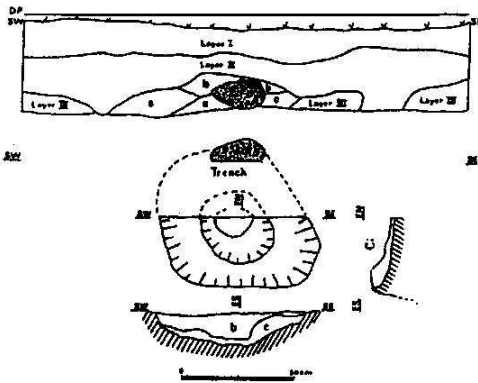
J-1 図 11 の 1 と 2 は頸部から内湾ぎみに外反する口縁部である。口唇部は薄く作り出されて、口縁外面に段差を生じさせている。



SOIL PROFILE OF N3W6

イリガエン貝塚土層注記

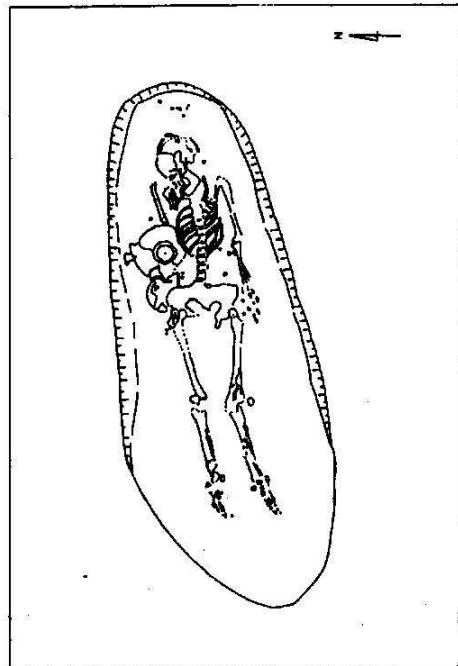
- I : 表土、黒色泥土貝層 Surface Layer with whole shape and broken shell
- II : 暗褐色泥土貝層、無文黒色土器群出土 whole shape shell layer with dark brown soil, Non-Decorated Black Pottery Phase (B2)
- III : 褐色シルト層、無文赤色スリップ土器群出土 yellowish brown silt layer, Non-Decorated Red-Slipped Pottery Phase (R2)



CLEMENTE IRIGAYEN II PROPERTY SITE
II 95-0
STA. MARIA, LAL-LO, CAGAYAN

- LEGEND:
- a: burnt shell
 - b: bepal shell fragments
 - c: burnt clay with burnt shell fragments
 - d: burnt clay, absence of shells

PLAN, SECTION AND ELEVATION OF HEARTH, N6W8
Non-Decorated Black Pottery Phase (B2)



PLAN AND PROFILE OF EXTENDED BURIAL IN IRIGAYEN SITE,
SANTA MARIA, LAL-LO
Non-Decorated Black Pottery Phase (B2)

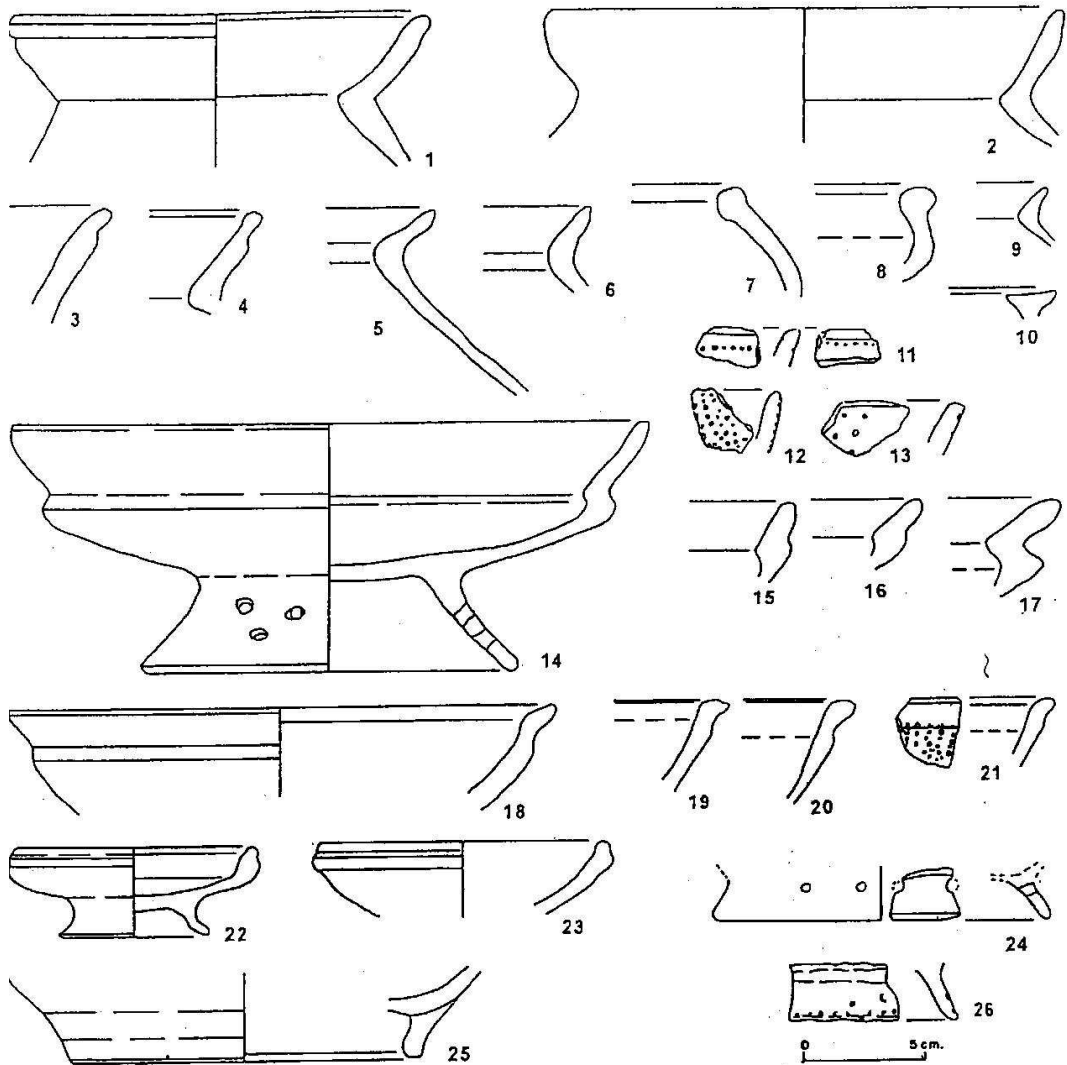
J-2 3は外反する口縁の口唇部を細く作り出して、口唇下外面に J-1 よりも大きい段差を作り出している。

J-3 4は J-2 と同じく、細い口唇部のために口唇下の段差が作り出されているが、口縁の立ち上がりは J-1 と同様に、内湾ぎみに外反する。

J-4 5と6は頸部が厚く作られ、そこから短い口縁部が内湾ぎみに外反しながら立ち上がる。口唇下外面は厚手に作られ、口唇部は尖る。

J-5 7と8は無頸で、口唇部は丸く作り出されている。

14



その他 全体の器形が予測できず、現在のところ、ひとつのタイプとして抽出できないものを一括した。9と10は全体の形が小型のJarになるものと思われる。10は口唇部を平らで幅広に作り出している。11から13は刺突文をもつJarタイプ土器の口縁である。無文赤色スリップ土器群のなかにも刺突文をもつ土器がわずかにふくまれるが、これらには有文赤色スリップ土器群の文様のような精緻さはない。

2-2. Bowl タイプ土器

無文赤色スリップ土器群のBowlタイプ土器は、有文赤色スリップ土器群に比較し形態のバリエーションが増している。

B-1 図11の14は圈足をもつBowlタイプの土器である。胴部中位には段差がある。口縁部は肥厚されていない。圈足には棒状工具による円形の透かしが3つ空けられている。15から17はこのタイプの口縁部である。15と16は段差が小さいが、17は大きい。有文赤色スリップ土器群のBowlタイプ土器の段差は圈足に近い部分にあるが(図7の1と2)、無文赤色スリップ土器群のBowlタイプ土器の段差は口縁に近いところにつけられている。

B-2 18は内湾ぎみに外反しながら立ち上がり、口縁部をS字状に曲げたBowlタイプ土器である。口縁をS字に曲げることによって、口縁外面には一条の溝が横位にめぐる。21も同じく口縁がS字状に曲げられているが、外面には刺突の集合がみられる。Jarタイプ土器の文様と同様に精緻さに欠ける。19と20はS字状の口縁にはなっていないが、口縁外面に溝がめぐる点で、このタイプに含めた。

B-3 22は小型の圈足付Bowlである。口唇部をつまみ上げるように作り出している。平らに作られた胴部は口縁で垂直に立ち上がっている。23も同様に口唇部が断面乳頭状に作り出されているが、胴部は外反しながら立ち上がり、口唇部だけが垂直に作り出されている。このタイプのBowlは他の遺跡には類例がない。

圈足部 24から26はBowlタイプ土器の圈足である。24は棒状工具による円形孔が2つ空けられている。25は内向する圈足である。有文赤色スリップ土器群にも同じタイプが存在する(図7の12)。26は圈足縁部外面に刺突が連続して横位に施されている。

2-3 他遺跡出土土器との類似性の比較

上で抽出したイリガエン遺跡出土無文赤色スリップ土器群の各タイプは、同時期の多くの遺跡で検出されている。図12に示したように、J-2、J-3、B-1、B-2の各タイプの口縁部が、北からコルテス(Cortez)、ファブリカ(Fabric)、ドンブリケ(Dombrique)、マバゴッグ洞穴で出土している。これらいずれの遺跡でも貝は検出されていない。貝以外の食料資源によって、河岸段丘上で居住を始めたこの時期の人びとはカガヤン川両岸に居住地を増やしていった。

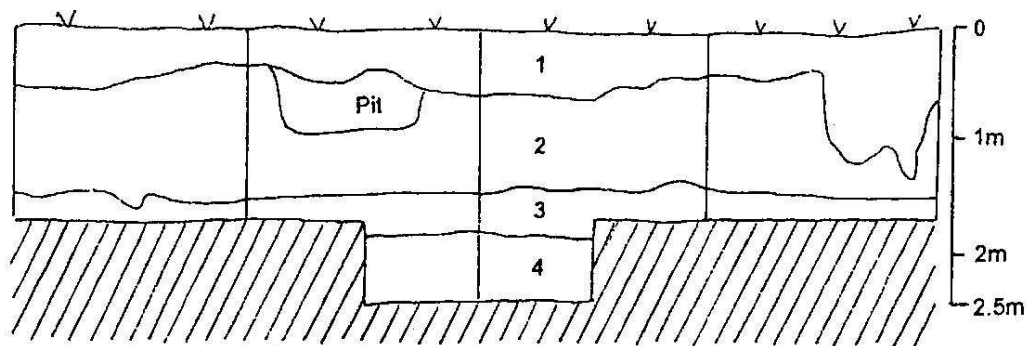
3. 有文黒色土器群

有文黒色土器群の時期の遺跡では再び貝層が形成されるようになる。現在までに発掘によって有

	Irigayen <small>イリガエン</small> 遺跡		
J 2			Cortez コルテス Dombrique
J 3			Cortez コルテス
B 1			Fabrica
B 2			Cortez コルテス
B 2			マバゴグ洞穴 Mabangog Cave 5cm.

文黒色土器群の出土を確認できた遺跡は図4に示したように少ないが、必ずしも遺跡が減少したとはいえない。カガヤン川河岸段丘上での最近の分布調査では、次の時期の無文黒色土器群に属するとこれまで考えてきた貝塚遺跡で有文黒色土器が表面採集されている。今後の調査によっては、この時期の遺跡数が増加する可能性がある。貝層はカガヤン川河岸段丘上に形成されており、その規模は長さ500m、幅50m、貝層深度2m(図13)と巨大である。貝層はマガピット貝塚同様、混土率10%以下の純貝層で形成されている。この時期以降今日まで河岸での貝塚形成は継続され、遺跡の規模は拡大している。遺構は貝層中から甕棺墓、伸展葬墓が検出されている。

黒色土器群の名前の由来は、有文・無文ともに器面の黒い色調にある。この土器は赤色スリップの塗布をおこなった後磨き調整が加えて焼成し、その直後の土器が熱いうちに取り出して、粃殻などの有機物で土器を覆って土器の器面に炭素を吸着させることにより、土器の内外面が黒色を呈するようになる。しかし注意しなくてはならないのは、黒色土器群の時期のすべての土器が黒色を呈するわけではないということである。土器焼成や炭素吸着を行なう以前の段階、器面の仕上げの段階で、土器



コルテス貝塚土層注記

1 : 表土攪乱層、黒色混土貝層 Surface Layer, whole shape and broken shell layer with dark brown soil

2 : 第1層、暗褐色混土貝層、上層から無文黒色土器群、下層から有文黒色土器群出土

Layer 1, whole shape shell layer with brown soil.

Upper portion: Non-Decorated Black Pottery Phase (B2), lower portion: Decorated Black Pottery Phase (B1)

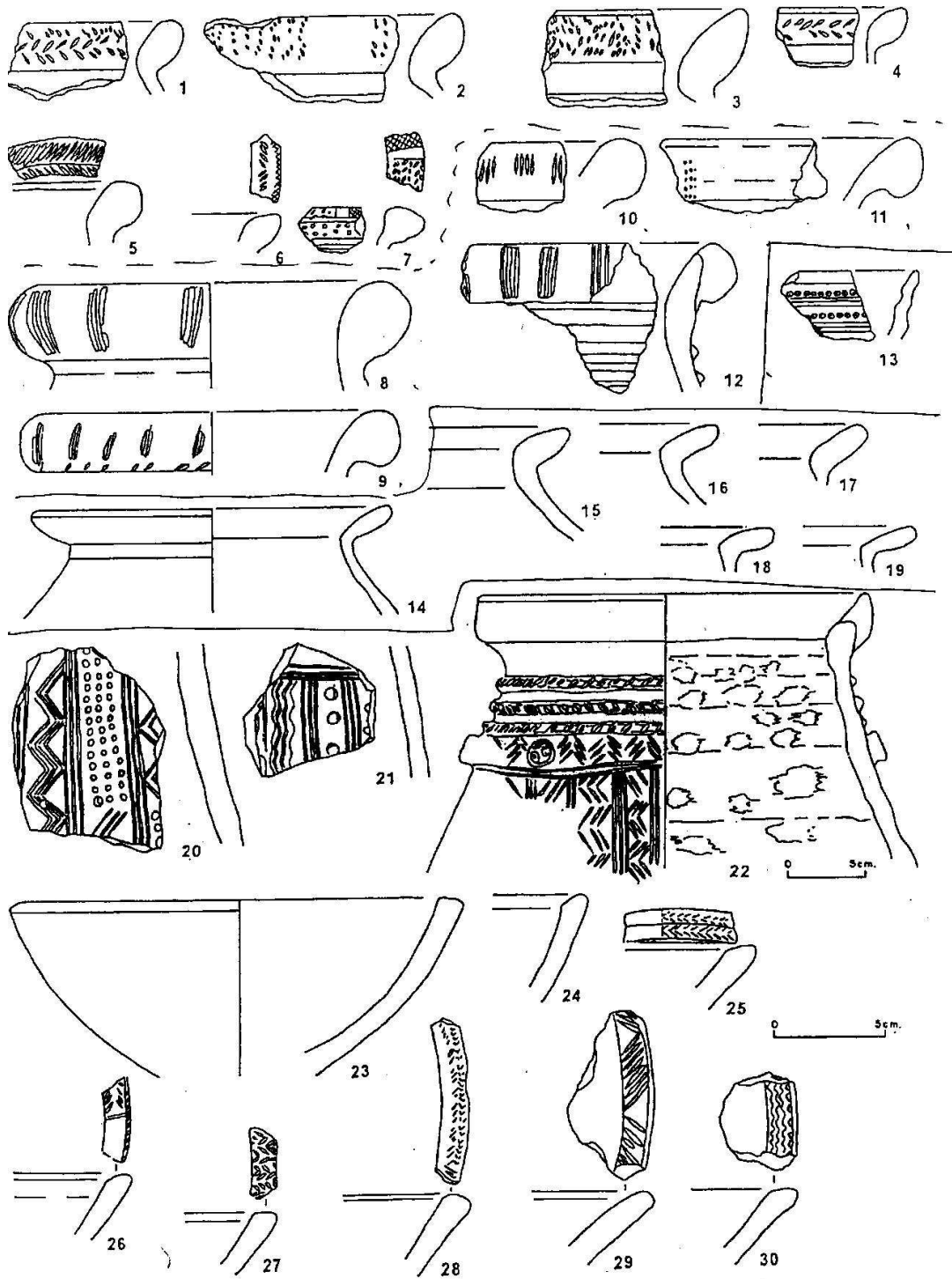
に赤色スリップが塗布されるため、土器焼成後に炭素吸着がおこなわれずに赤色を呈する土器も多く存在する。黒色土器群のなかには、1個体の土器の半分だけ炭素吸着がおこなわれたため、半分が黒色、半分が赤色を呈する土器も例外的に存在する。しかしながら、これ以前の有文・無文の赤色スリップ土器群と区別し、有文・無文の黒色土器群の特徴として顕著な黒色の器面をもって、土器群の呼称とした。

ラロ貝塚群で有文黒色土器群を主体的に出土する貝塚には、コルテス、ドンブリケ、ダビッド(David)、バガッグ1などがある(図4)。とくにコルテス貝塚では、無文赤色スリップ土器群→有文黒色土器群→無文黒色土器群という相対的な編年序列が層位的に確認できた。また、ドンブリケ貝塚では無文赤色スリップ土器群→有文黒色土器群、ダビッド貝塚では有文黒色土器群→無文黒色土器群という土器群の変化が層位的に確認できている(Garong 2002, 小川 2003a)。以下では有文黒色土器群の出土資料がラロ貝塚群中もっとも多く、器形の細分が可能なコルテス貝塚の出土土器を中心に論を進める。

3-1. Jar タイプ土器

有文黒色土器群の Jar タイプ土器は、J-1 から J-3 までに細分される。

J-1 図14の1から12がこのタイプの Jar の口縁部である。頸部から外反しながら立ち上がる口縁部を大きく肥厚させている。口縁外面あるいは口唇部に短い沈線や刺突による文様が配されている。1と4は口縁外面に、5は幅広に作り出した口唇部に、矢羽根状に配した横位の短く太い沈線文をもつ。2と3は口縁外面に細長い刺突文の集合体を配している。6と7は小型の Jar 口縁で、6には幅広の口唇部に、細い沈線による格子状文と短い沈線文が施文されている。同じ文様は7の口唇部にもみられる。さらに7には口縁外面に刺突文が配されている。8から12は口縁部の肥厚が大きく、口縁外面の文様構成も、櫛歯状工具による縦位の沈線文を等間隔に配する点で類似しており、今後資料の増加によっては別の分類タイプを設定しなくてはならない可能性がある。12のように頸部外面に2条の隆帯がめぐる点は、下で述べる J-3 タイプと類似している。しかし全体の器形が予測できない現在では J-1 の範疇に留めておくことにする。



J-2 14から19は、頸部から大きく外反する口縁部を特徴とする。口縁に厚みがなく頸部の屈曲が鋭角なものと、15のように頸部屈曲部が厚く作り出されたものがある。口縁部の急な角度の折り返しは他の時期のJarタイプ土器の口縁には見られず、この時期の判別を容易にする資料である。

J-3 22は垂直に立ち上がる口縁をもち、胴部上半の横位の隆帯や、沈線による連続山形文など、文様が多用された資料である。3条の隆帯にはそれぞれ互い違いの方向に切り込みが入れている。その下には3本一単位の沈線で連続山形文が構成されている。さらにその下には、やはり3本一単位の沈線による文様区画が等間隔に配され、そのなかにジグザグ文が施されている。また隆帯の下に、円盤状の粘土が貼付けられており、これには3個の刺突が施されている。器体から剥がれ落ちたこの貼付け部分だけの資料は、有文黒色土器群を出土する貝塚でしばしば目にする事ができる。3個の刺突文もこの貼付け部分には一般的である。欠落した部分だけをみると、3個の刺突は人や動物の目と口を表しているものと考えていたが、22の貼付けと刺突の位置はやや傾いていて、顔とするには無理がある。20と21はこのタイプの胴部文様が見られる資料である。20にはジグザグ文のなかに刺突文が3列施文されている。21では大きな刺突が1列、縦に並んでいる。

その他 13は有文黒色土器群のなかで特異なため、その他とした。口縁部は蛇状曲線を描きながら立ち上がる。外面には上下2列の円形刺突文が連続して並ぶ。施文工具は細い竹管のようなものと考えられる。

3-2. Bowlタイプ土器

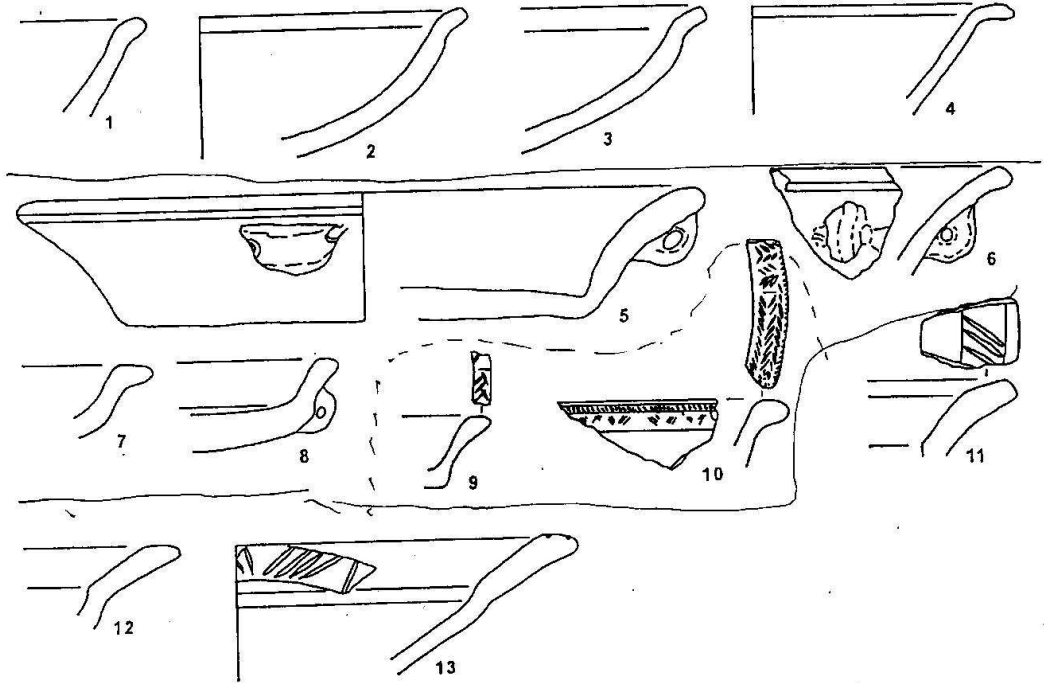
有文黒色土器群のBowlタイプ土器はB-1からB-3までに細分される。**B-1** このタイプの口縁はわずかに厚手に作られている。胴部はやや内湾ぎみに外反しながら立ち上がり、口唇部を幅広に作り出している。図14に提示した口縁(26~30)は、いずれも口唇部に文様が施文されている。文様は太く短い沈線を矢羽根状あるいは連続山形に配したものとなっている。29はわずかに外反させた口縁部の内面に、7本一単位の太い沈線を山形に連続して配置した文様を施されている。ここでは文様のものを図示したが、無文のものが大半である。

B-2 図15の1から4は、口縁部を外反させてS字状に作り出している。1のように口縁の外反が小さいものや、4のように胴部が直線状に立ち上がり、口縁が水平に折り曲げられるものもある。

B-1とB-2には圈足が付いている可能性があるが、発掘資料には圈足は見当たらなかった。

B-3 5は平底の浅いBowlである。大きく外反する厚手の口縁部が、平らな底部から直接立ち上がっている。口縁外面には大きな瘤状の突起が貼付けられ、横位の穿孔がある。このBowlはドンブリケ貝塚の甕棺の蓋に転用されていた。6は薄手に作られている。口縁外面の貼付けは瘤状ではなく、薄い耳状で、やはり横位に穿孔がある。8は小型で、耳状の貼付けによる把手が底部と口縁との境にある。9と10は口縁部に文様をもつ。10は口唇部に太く短い沈線を矢羽根状に配し、口縁外面には同じく斜位に施文するとともに、太く短い沈線と細い3本一単位の沈線とを交互に配置した逆位の連続山形文を構成している。5と6、文様のある小型の9、10とを同一の形態分類の範疇に入れておくことは躊躇するが、全体の器形が判明するまで、別のタイプを設定することは留保する。

B-4 11から13の特徴は、口縁と胴部の境に段差があることと、幅広く作り出された口唇部に文様が配されている点である。文様構成は3ないし4本一単位の太い沈線が斜位に配置され、連続山形文



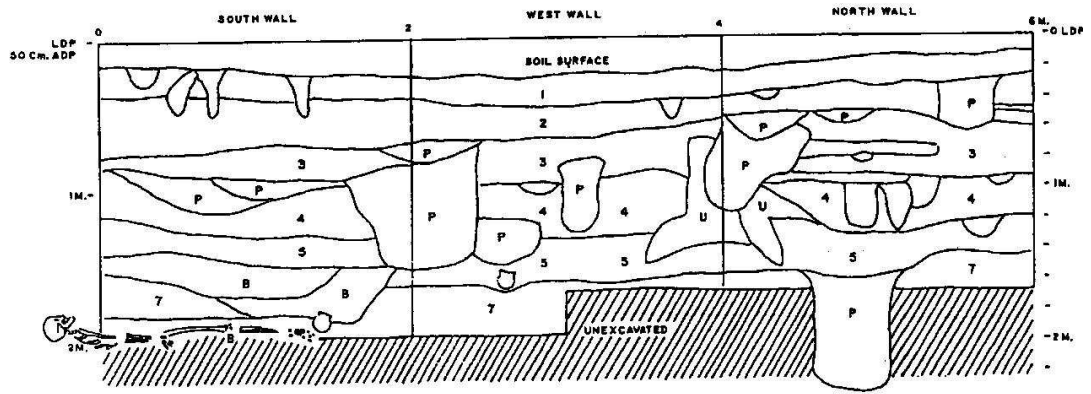
を構成している。こうした文様と特殊な器形が一体化している資料である。

3-3 他遺跡出土土器との類似性の比較

図 16 は有文黒色土器の Jar タイプ、図 17 は Bowl タイプ土器の口縁形態を、コルテス、ドンブリケ、ダビッドの 3 貝塚間で比較したものである。ダビッド貝塚の資料が少ないのは、発掘面積が他の 2 遺跡より小さいためである。しかし Jar、Bowl とも各タイプがそれぞれの遺跡から出土している状況が分かる。B-4 タイプについては現在のところ、コルテス貝塚から出土しているだけである。しかし最近の表面採集では、カタヤワン貝塚のコンシソ(Conciso)遺跡付近で B-4 タイプの Bowl 口縁が得られている。

4. 無文黒色土器群

無文黒色土器群の時期の遺跡も、カガヤン川の河岸段丘上を中心に立地している。カタヤワン(Catayauan)、サンタマリア、ラロ・セントロ(Lal-lo Centro)、コルテス、サンロレンソ(San Lorenzo)などの貝塚では、長さ 1km~500m、幅 100m、深度 2m という巨大で密度の高い純貝層が形成されている。これら巨大貝塚の形成は 2000 年前の有文黒色土器群の時期からはじまり、無文黒色土器群の時期にも貝の利用が継続され、さらに無文黒色土器群の時期が終わる 1000 年前以降においても貝殻の廃棄(貝層形成)が続き、今日までカガヤン川下流域に生息するカビビを中心とした貝資源の採集活動



STRATIGRAPHIC PROFILE OF WALLS, CONCISO SHELL MIDDEN (SQUARE N6E2)

コンシソ貝塚土層付記

- 1 : 表土、黒色土混土貝層 Surface Layer, whole shape and broken shell layer with blackish soil.
 - 2 : 暗褐色混土貝層、陶磁片と褐色土器片出土 Shell Layer with Blackish Soil, Chinese Porcelain and Brown colored pottery shreds
 - 3~5 : 暗褐色混土貝層、無文黒色土器群出土 Shell Layers with Blackish Brown Soil, Non-Decorated Black Pottery Phase (B2)
 - 7 : シルト層、無文赤色スリッ土器群出土 Yellowish Brown Silt Layer, Non-Decorated Red-Slipped Pottery Phase (R2)
- P: Pit U: Root

が行なわれている(小川 1997)。

この時期の貝塚から検出された遺構には、頭位方向を東あるいは西に向けた伸展葬墓がある。副葬品として、体の一部に寄り添うように Jar や Bowl タイプの土器が埋納されている。カタヤワン貝塚のコンシソ、サンタマリア貝塚のイリガエン(図 10 右下)、サンロレンソ貝塚のシリバン(Siliban)などの各貝塚から検出された伸展葬墓には、貝層下のシルト層を掘って墓壇とした事例が多くみられる。コンシソ貝塚ではシルト層中の墓壇の上に折り重なるように、貝層中にも伸展葬墓が引き続き造営されている様子をうかがうことができる(図 18, Garong 2001)。これら墓壇から出土した人骨の年代が、ほぼ 1500 年前を示していることから、無文黒色土器群の開始時期が特定できた(表 1)。このほかの遺構としては、イリガエン貝塚で前述の炉址が貝層の最下層で検出されている(図 10 左下)。炉の掘り込みがシルト層に及んでいて、その構造が明らかとなった。シルト層に掘り込まれた直径 50cm の穴に粘土を張って炉を作っていた(De la Torre 2000)。炉の周囲には径 5 cm ほどの小さな穴が廻っており、炉を覆う上部構造の存在を示唆していた。また、炉址は焼けた貝殻や焼土、炭化物、灰に覆われており、貝を剥き身にする加工作業や貝の調理などに使用された可能性を示していた。

無文黒色土器群は、それ以前の有文黒色土器群にみられるように、器面の調整方法や黒い色調の点で類似点が多い。しかし文様の有無や口縁形態のバリエーションの多さという点では、その違いは明白である。以下では無文黒色土器群の口縁形態の幅広いバリエーションが得られたコンシソ貝塚と、伸展葬墓の副葬品として完形土器が多く得られたイリガエン貝塚の資料を中心にこの時期の Jar と Bowl タイプ土器の特徴を説明する。

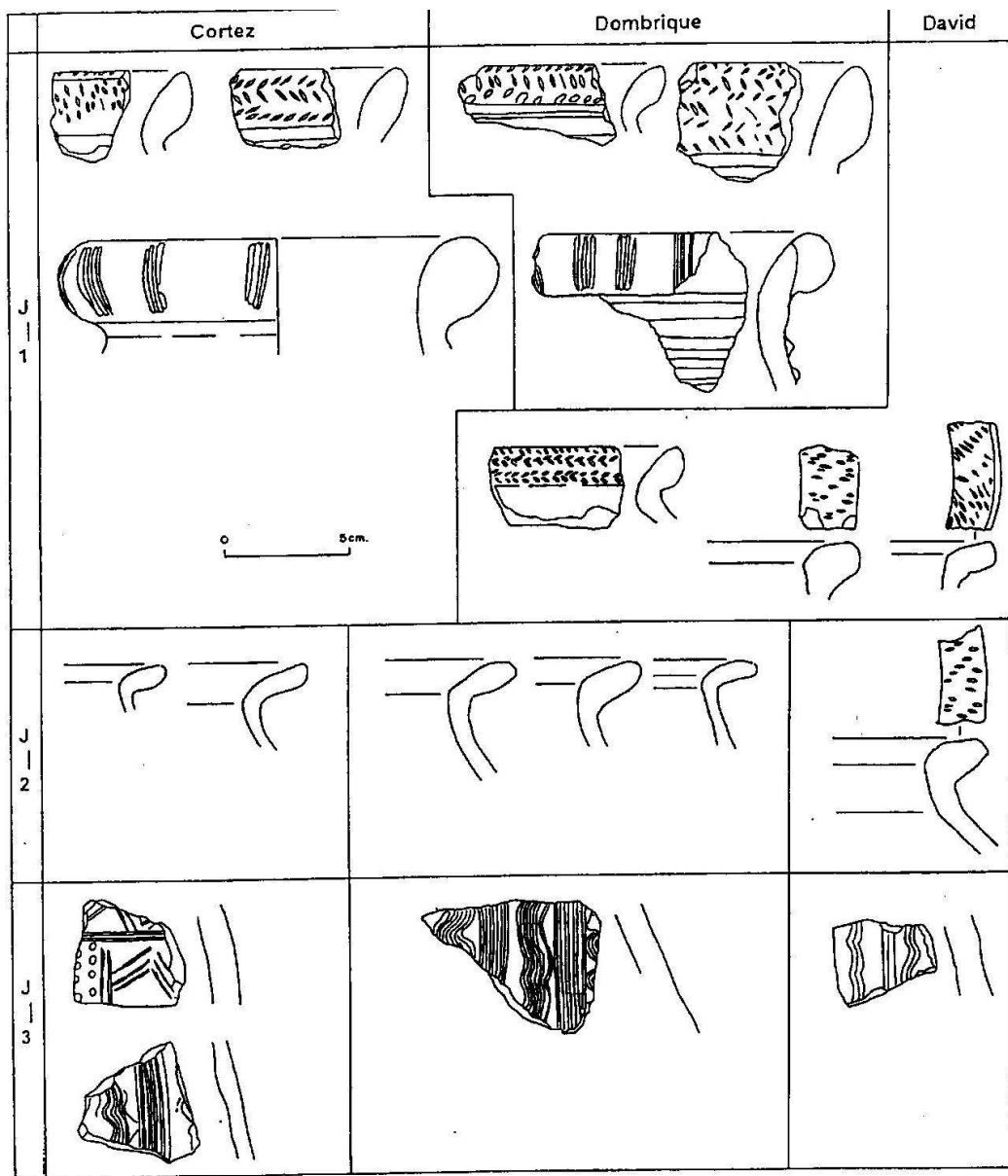
4-1. Jar タイプ土器

無文黒色土器群の Jar タイプ土器の口縁形態には J-1 から J-11 までのバリエーションがある。

J-1 図 19 に示した J-1 タイプ土器の口縁形態の特徴は、内外面ともにふくらみをもって外反し、口唇部が細く尖っている点である。4 は肩部に 2 条の隆帯が廻っている。J-11 と同じく、有文黒色土器群の J-3 と形態が似ているが、文様は施文されていない。

J-2 J-2 タイプの特徴は、頸部から厚みを増して外反し、口唇部で細く尖る点である。口縁部内面は口唇近くで凹状にくぼむ。3, 4 の完形品では頸部内面が垂直に立ち上がるように作り出されている。

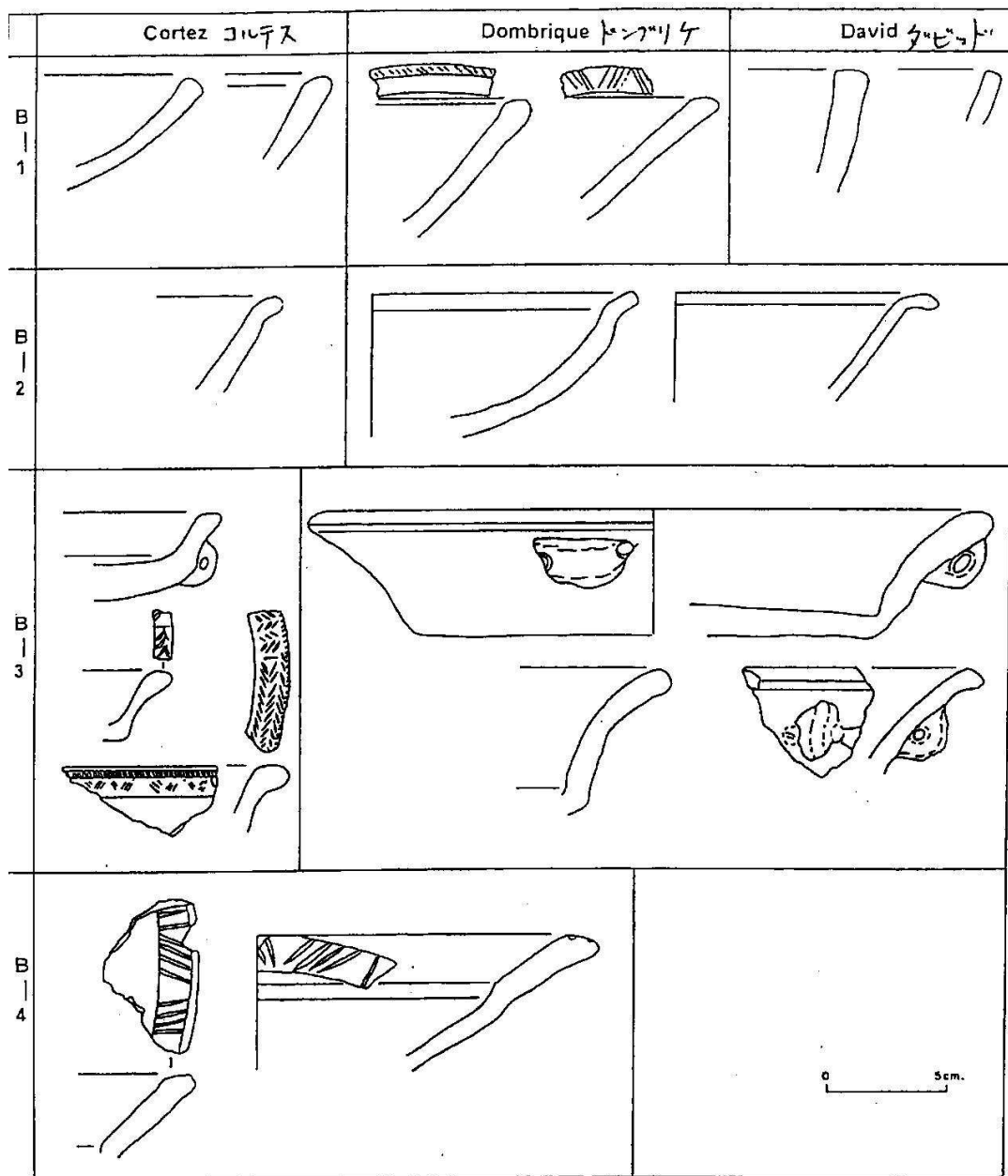
J-3 J-3 タイプの特徴は、口縁部がほぼ同じ厚みをもっている点である。口唇部ではやや薄くなるが、



口縁部全体が矩形を呈している。

J-4 J-4タイプの特徴は、頸部から内外面ともにふくらみをもって立ち上がり、口唇部が大きく開いている点である。のちに述べる J-6タイプとの違いは、J-6の口縁部内面は凹状にくぼんでいるが、J-4は凸状にふくらんでいる点である。

J-5 このタイプの口縁は、頸部からほぼ同じ厚みで立ち上がるが、J-3のように矩形ではなく、口縁



部内面が凹状にくぼんでいる点である。

J-6 口縁部が頸部から広がりながら立ち上がり、幅広い口唇部を作り出す。しかし J-4 とは異なり、口縁部内面の断面は凹状の曲線を描く。3 から 6 のように口唇部がわずかに外に突出するものもある。

J-7 図 20 に示したように、このタイプの特徴は、口唇部外面でわずかに突起が作り出されている点である。

J-8 短く厚みのある口縁部が、頸部からほぼ水平に屈曲するかたちで作り出されている。現在までこのタイプの類品は見つかっていないが、ひとつのタイプとして抽出した。

J-9 長い頸部がほぼ垂直に立ち上がり、外面が肥厚された口縁部がやや外反する形態を呈する。図では 1 から 4 まで、口縁部は細部で異なる形態を示すが、2 と 4 のように、肥厚された口縁外面が平らに面取りされている点の特徴のひとつである。スケールが小さいため分かりにくい、5 も同じ口縁形態を示す。

J-10 無頸の Jar 口縁である。口縁部を肥厚させ、ほぼ垂直に立ち上げている。口唇部は平らに作り出されている。

J-11 イリガエン貝塚の表面採集資料である。口縁部の形態や肩部をめぐる隆帯は、有文黒色土器群の J-3 タイプに類似している。しかし文様は施されていない点異なる。無文黒色土器群の時期に移行してから文様は施されなくなったとしても、それ以前の時期の土器製作の技術伝統を継承しているものと考えられる。

4-2. Bowl タイプ土器

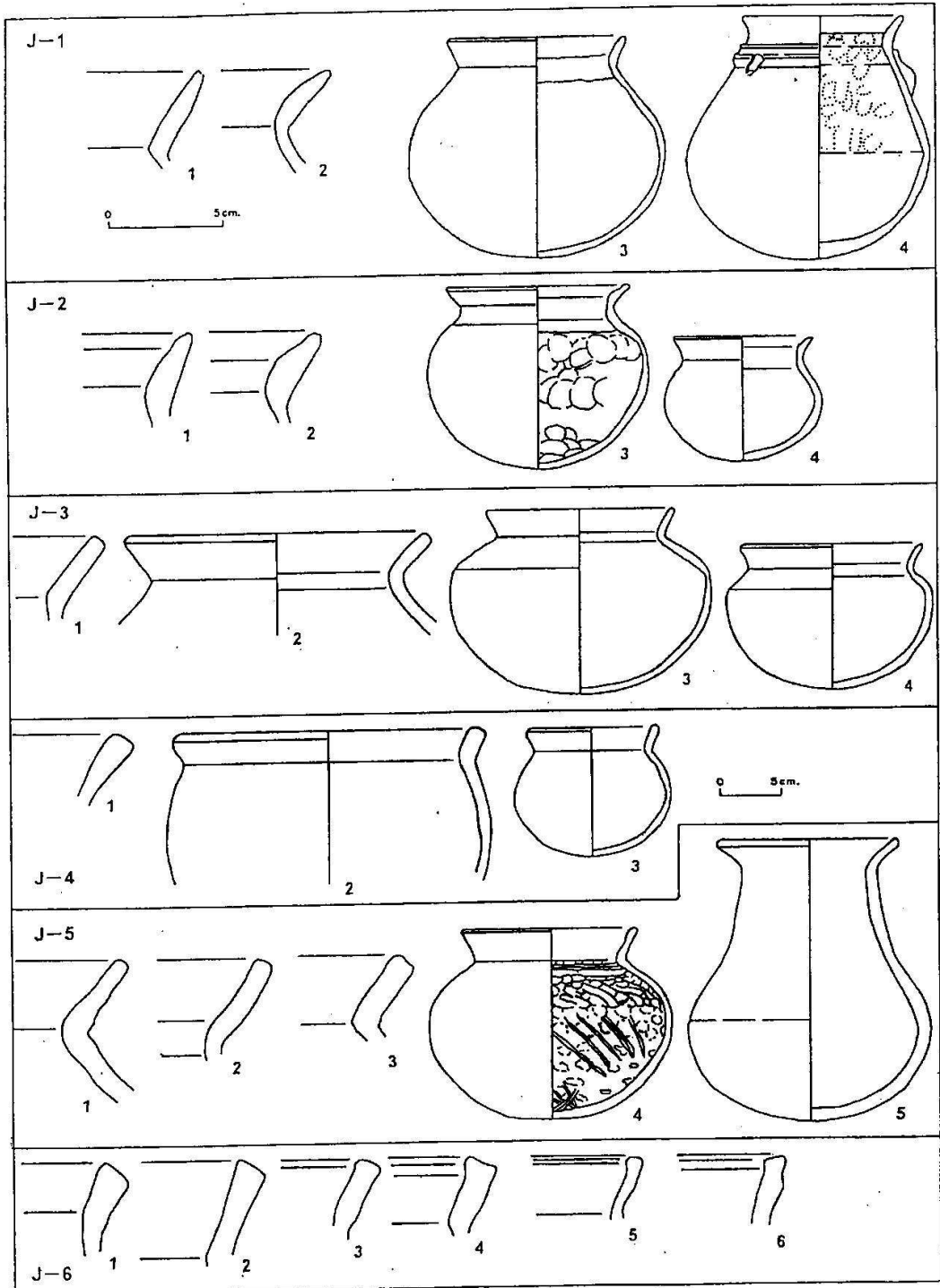
B-1 図 21、B-1 の 1 は低い圈足をもつ Bowl である。内湾ぎみに外反する胴部の先端で口縁部はやや肥厚して作り出されている。有文黒色土器群の B-1 タイプの口縁と類似している。実際、2 つのタイプの口縁部だけをそれぞれの土器群から抜き出しても、見分けはつかない。圈足では胴部との接合部付近に穿孔がある。

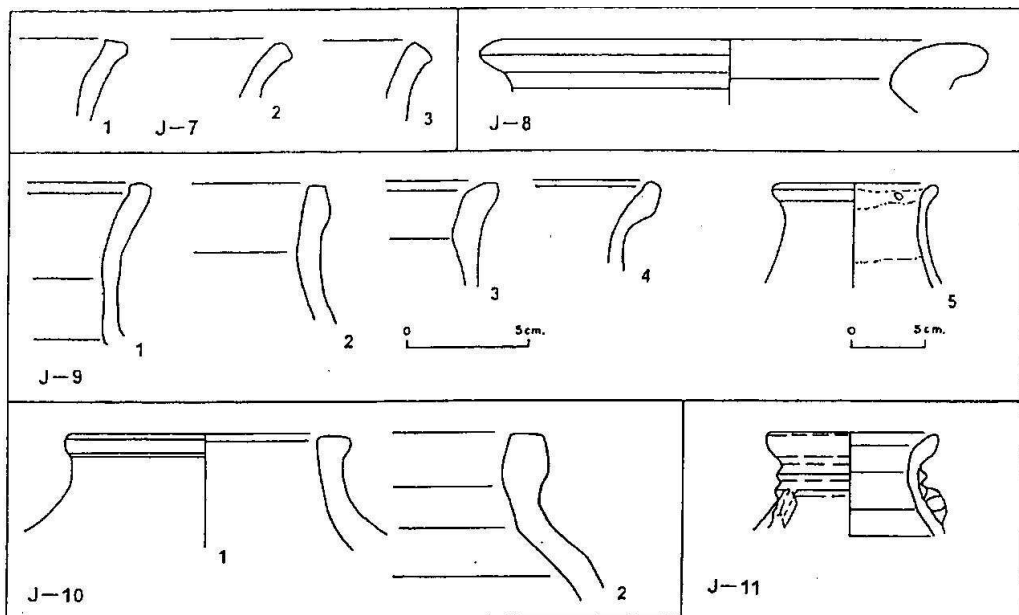
B-2 胴部は内湾ぎみに外反しながら立ち上がる。その先端で口縁部はさらに外側に折り曲げられている。1 から 3 は口縁部の屈曲が小さいが、4 と 5 はほぼ水平に折り曲げられている。5 には高い圈足が付く。圈足には三角形の透かしが 2 段廻っている。このタイプも有文黒色土器群の B-2 との見分けがむずかしい。

その他 図 21 の 6 は高い圈足をもち、大きな穿孔のある円形輪状の土器である。器部から圈足に向けて垂直方向に径 1cm の穴があげられている。器部は磨かれている。この輪状の器部の反対側は台形の器部になることが最近の調査で判明している。圈足の上の器部の一方が大きな穴のある輪状、その反対側が水平に近い傾斜をもつ台形という全体の形になる。この奇妙な形態の土器の機能については解明されていない。しかし無文黒色土器群の遺跡ではこれまでコンシソ、イリガエン、コルテスなどで検出されている。

4-3. 他遺跡出土土器との類似性の比較

図 22 は無文黒色土器群 Jar タイプ土器の類似性を遺跡間で比較した図である。コンシソ、イリガエ





ン以外でも4タイプの口縁形態が2遺跡で検出されている。コルテス貝塚では無文黒色土器群の出土資料が少ないため、これら4タイプすべては出土していないが、無文黒色土器群を主体的に出土するダビッド貝塚では、4タイプのすべての類似性が確認された。

Bowlタイプ土器の2タイプの口縁形態については、他の遺跡から十分な比較資料が得られていない。

結論

ラロ貝塚群から出土した4つの土器群それぞれの構成要素である、器種(Jar と Bowl)と各時期に特有の土器形態について述べてきた。そしてそれぞれの時期のメルクマールとなる口縁形態を同時期の遺跡間で比較し、各時期の遺跡分布の空間的広がりを確認した。こうして抽出され、その有効性が確認された4つの時期のメルクマールとなる口縁形態は、今後の調査で新たに発見された土器と遺跡の時期判別を容易にすることが期待される。

しかし解決されていない問題も多く残っている。有文赤色スリップ土器群から無文赤色スリップ土器群への移行は未だ層位的に確認されていない。その正確な絶対年代も今後測定されなくてはならない。また各時期を判別するメルクマールである口縁形態は、さらに細分され、精緻な編年体系に再編される必要がある。そのためにも完形品の資料の増加が望まれる。こうした作業を経て、今回の作業で明らかとなったラロ貝塚群全体における遺跡の時代的変遷(図4)が、今後一層精緻な情報として獲得される。そして遺跡の空間的広がりや時間的変遷についての情報によって、これまでラロ貝塚群を形成してきた人びとの活動実態の解明にさらに近づくことができる。それにより、この調査の最終目的である低地農耕社会と山地狩猟採集社会の4000年間にわたる交流の歴史を復元し、解明すること

が可能となる。

	Conciso	David	Cortez
J 1			
J 2			
J 6			
J 9			

謝辞:

本研究はフィリピン国立博物館の調査として企画され、日本人研究者と共同で実施されている研究成果に基づいている。また本研究は以下の研究助成により実施が可能となった。末尾ながら調査に協力くださった方々に記して感謝したい。平成 15 年度文部科学省科研費、基盤研究 A(1)「北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査—先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の解明」(課題番号 15251005、小川英文研究代表者)、特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」(領域番号 606、内堀基光領域代表者) 計画研究「生態資源の選択的利用と象徴化の過程」(課題番号 14083207、印東道子研究代表者)、基盤研究(B)(1)「近代における「考古学」の役割の比較研究—その本質的表象と政治的境界の関連を軸に」(課題番号 15320079、余語琢磨研究代表者)、および平成 14、15 年度高梨学術奨励基金研究助成「カガヤン河下流域における貝塚遺跡群出土土器の編年的研究」(小川英文研究代表者)。

註

- 1: マガピット貝塚での 14C 年代測定値は 2 点 : 2,800±140BP(N-5396、半減期 5,730 年), 2,760±125BP(N-5397、半減期 5,730 年), カタヤワンで 1 点: 1,060±290BP(N-5398、半減期 5,730 年)が得られている。
- 2: カビビなどの淡水貝が生息できるためには川の水が常に流れている必要がある。沼沢性の環境では水の流れが緩慢となる。貝が生息できない沼沢がマガピット貝塚の下流に広がっていた原因として想定できるのは海進である。しかし約 6000 年前にピークを迎えた「縄文海進」とは大幅に年代がずれているため(無文赤色スリップ土器群から有文黒色土器群の間、すなわち 3000BP~2000BP)、別の理由を用意しなくてはならない。

文献目録

青柳洋治・M. L. Aguilera, Jr.・小川英文・田中和彦

1988 「ラロ貝塚群の発掘」、『上智アジア学』6: 63-104

1991 「ラロ貝塚群の発掘 (3)」、『上智アジア学』9: 49-137

1993 Excavation of Hill Top Site, Magapit Shell Midden in Lal-lo Shell Middens, Northern Luzon, Philippines. *Man and Culture in Oceania* 9: 127-155

De la Torre, A.

2000 Preliminary Report of the Lal-lo, Cagayan, Archaeology Project: Clemente Irigayen Property Site (II-1995-O), Santa Maria, Lal-lo, Cagayan., 『東南アジア考古学』20: 67-110

Garong, A. M.

2001 Culture in Trash. An Archaeological Excavation of Conciso Property Shell Midden Site, Catayauan, Lal-lo, Cagayan Valley, Northern Philippines, 『東南アジア考古学』21: 120-145

2002 Archaeological Exploration and Excavation in Cagayan Valley, Northern Philippines. 小川英文(編) 『カガヤン河下流域の考古学調査—狩猟採集民と農耕民の相互依存関係の歴史過程の解明』: 33-68

小川英文

1996 「狩猟採集民ネグリのトの考古学—共生関係が提起する諸問題」、スチュアート ヘンリ(編) 『採集狩猟民の現在』: 183-222、言叢社

1997 「貝塚洪水伝説—フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」、『東南アジア考古学』17: 119-166

1998 Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines—Archaeological Study on the Prehistoric Interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest, 『東南アジア考古学』18: 123-166

1999a 「東南アジアと日本の貝塚の比較」、『季刊 考古学』66: 29-34

1999b Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines, 『東南アジア考古学』19: 93-114

2000a 「狩猟採集民と農耕民の交流—相互関係の視角」、小川英文編 『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店

2000b (編) 『ラロ貝塚群の発掘』、平成 7~9 年度科研成果報告書

2001 「ラロ貝塚群の発掘調査とその年代」、『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』12: 6-16

2002a (編) 『カガヤン河下流域の考古学調査』、平成 11~13 年度科研成果報告書

2002b Chronological Context of Non-Decorated Black Pottery Phase of Lal-lo Shell Middens, 小川英文(編) 『カガヤン河下流域の考古学調査』: 103-115

2002c 「ラロ貝塚群赤色土器の様相—無文赤色土器の位置づけをめぐって」、『外大東南アジア学』7: 73-96

2003a 「ラロ貝塚群出土有文黒色土器群の型式学的編年研究」、『東南アジア考古学』23: 23-57

2003b 「野性の残像—過去をめぐるイデオロギーの磁場」、スチュアート ヘンリ(編) 『野生』の誕生—未開イメーজの歴史』: 71-102、世界思想社

田中和彦

1993 「フィリピン完新世・先鉄器文化編年研究序説」、『東南アジア考古学』13: 173-209

1996 「ルソン島北部における方角石斧に伴う土器の検討—沈線による連続菱形文土器の検討」、『東南アジア考古学』16: 149-160

1997 「カトゥガン(Catugan)貝塚の発掘調査」、『東南アジア考古学』17: 210-225

1998a 「サン・ロレンソ III 貝塚(シリバン遺跡)の発掘調査とその問題」、『東南アジア考古学』18: 263-287

- 1998b 「ルソン島北部、ラロ貝塚群、バガッグ I 貝塚の発掘調査と若干の問題」、『上智アジア学』 16: 171-211
- 1999 「フィリピン、ラロ貝塚—巨大貝塚の発掘と成果」、『季刊考古学』 66: 75-78
- 2002a 「フィリピン、ルソン島北部の土器」、第 15 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『東南アジア考古学最前線』: 34-45、クバプロ
- 2002b Ceramic Chronology in Northern Luzon: Typological Analysis of the Pottery from the Lal-lo Shell-middens. Ph. D. Dissertation. University of the Philippines, Quezon City.
- 2003 「ルソン島北部、カガヤン川下流域の貝塚遺跡に見られる居住の断絶と継続—河川の氾濫との関連で」、『環境情報研究』 11: 83-99

表 1 ラロ貝塚群 C14 年代測定値